



穴

春待ち りこ

街のはずれにその穴はあった

何の穴なのか
何故そこにあるのか
いつから開いているのか
そして、一体どこに繋がっているのか
誰も知らない

ただ、古くからそこにあつて
この街に暮らす誰もがその穴のことは知っている

そこにあるのが当たり前すぎて
自然がつくった穴なのか
それとも人工的に掘られたものなのか
そんな素朴な疑問さえ抱くものもいなかった

穴からは時々。。。
強い風が吹いてくる
ゴォ〜っという大きな音をたてて
街中にその風は流れこんだ

しばらくすると。。。
その風は、ピタッと止んで
まるで何事もなかったかのように
当たり前のただの穴に戻るのだ

その風が吹くたびに
この街の住人が増えた

そのことに気づいていながらも
僕は、何の不思議も感じなかった

だってそれは、僕らにとって
ただの日常だったのから。。。

風が吹くたびに住人が増える
僕は、風が吹くのを楽しみにしていた
仲間が増えていくというのは嬉しいことだ

だが、だんだんそうも言っていられなくなった

住人が。。。増えすぎたのだ

狭いところに
ぎゅうぎゅうと押し込められている

そんな圧迫感が
街全体に広がっていた

ある日、僕は穴に向かって祈った
もう。。。風が吹きませんように

僕の祈りが届いたのだろうか

その日から。。。
風が止んだ
あのゴォ〜っという大きな音とともに
この街の住人を増やしていった風が
。。。止んだのだ

神の助けだ。。。
これで、街は救われる。。。。

僕はそう思っていた
だが。。。時、すでに遅し。。。。

住人は、増えすぎてしまっていた
この街からあふれんばかりに

犯罪が増えた
失業者も多くなった

食糧不足も深刻になってくる

もちろん。。。
プライバシーなど守られるはずもない
気の休まる間もなかった

そんな暮らしに
僕は、とうとう我慢ができなくなった

「こんな街。。。
失くなってしまえばいい！！！」

穴に向かって、叫んだ
心から。。。そう願ったんだ

すると。。。
いきなり、街が揺れた

地震???

次の瞬間。。。
僕らの街は
暗闇の中に落ちていった

○ ○ ○

僕らの街はなくなった
僕の願いは、また叶えられた

そして、叶ったと同時に。。。
僕は無になった

この街と共に。。。

◎ ◎ ◎

東京の大学に入学した息子は
去年から、一人暮らし始めている

息子の部屋は
入学した時以来だから

一年ぶり。。。

こちらで、姪っ子の結婚式があったので
息子の部屋に泊めてもらうことにしたのだ

ホテル代もバカにならない
可愛い姪っ子のため
ご祝儀もはずんでしまったし

ここしばらくは
引き締めて暮らさなくちゃ。。。

息子の部屋のドアを開けた時
その汚さにびっくりして、一瞬言葉を失った

気を取り直し
式場から一緒に帰ってきた息子に聞いた

「あんだ。。
最後に掃除をしたのはいつ？」

「えっと。。
彼女がいつも掃除しにきてくれてたんだけど
半年前に別れちゃってさ。。
それ以来だから。。半年前。。かな。」

「半年って。。
こんなところじゃ眠れないわよ
とりあえず、掃除するわ。。
掃除機はどこ？」

息子は、部屋の隅の掃除機を指さした。。
私はすぐさま。。掃除機のコンセントを差し込んだ

「こんな街。。
失くなってしまえばいい!!!」

えっ？

何か、声が聞こえたような気がした
でも、部屋には。。
私と息子の他には誰もいない
掃除機から聞こえたような気もしたが。。

掃除機が。。喋るわけじゃない
きっと、気にせいね。。

「あら、やだ。。ゴミパックがいっぱいじゃない
これじゃあ、ゴミを吸い込まないわよ。。。」

慣れない東京。。。
結婚式に出た疲れもあって
私は少し、イライラしていた

ちょっと乱暴に
掃除機のごみパックを取り出し。。。。

ゴミ袋にほおりこんだ

掃除機の中のごみは
きれいさっぱりなくなった。。。。

おしまい